

エッセイ集「それぞれの3.11その日から私は」

光田 豊（名古屋市上下水道局 受託研究員）

◆その日14時46分

「ん？トランシットの気泡がズレている」当時私は、建設会社で現場監督をしており、年度末の竣工検査に向けて出来形測量をしていた。作業員がどこかで大きな地震があったのではないかと事務所のテレビをつけると東北地方で大きな地震が発生したことが分かった。「また、地震か。」検査に追われていた私は、引き続き測量を行い資料を整理して帰宅した。自宅でテレビの映像を見て何かの映画かと思うような衝撃を受けたことを今でも覚えている。津波にのみこまれる町、火災により燃えている町、繰り返し報道される映像にくぎづけとなり、これは大変なことになったと。

◆その日からしばらくして

建設業界では、すぐに資材や人材が不足することは容易に想像できた。重機、ダンプ、発電機などレンタル会社からすぐに無くなった。中部地方から職人がいなくなり、東北に行くとの声が聞こえた。資機材の確保、職人の確保に苦労をしつつも、世間に流され何となく過ごしていた。

子供が小さかったこともあり、被災地への支援など行くことはなく、いつもどおりの生活を続けて、いつの間にか震災のことを忘れていた。

自分の町は何も変わらずいつもの生活、どこか遠い国での戦争のような感覚。

2年後、私は建設会社から転職して、公務員となり上下水道局に配属された。名古屋市が被災地支援の取り組みとして、岩手県陸前高田市や宮城県気仙沼市へ上下水道局から職員の派遣を続けていることを知った。忘れていた被災地の記録を見て、3.11その日の記憶が思い起こされた。テレビで声を無くして見た映像、燃える海、燃えつきた町。



宮城県気仙沼市

◆その日から7年後

単身、気仙沼へ行くことになった。

きっかけは、設計部所に異動となった際に、気仙沼市から1年の復興支援業務を終えて戻ってきた職員との出会いであった。どこか疲れた雰囲気があり、とても大変であったことは想像できたが、話を聞くに意外な答えであった。

「よかったよ また行きたい。」私の中で何かが変わった瞬間だった。これまで、土木に携わってきた経験を活かして被災地で何かできるかもしれない。今からでも遅くはない。心のどこかで、あの時すぐに行けなかった後悔を繰り返さないよう、家族に相談して決めた。

気仙沼市では建設部下水道課に配属され、設計と現場監督業務を担当した。気仙沼市の玄関口である内湾エリアの区画整理事業に携わり、他都市からの派遣職員と気仙沼市のプロパーと共に、迫る復興期間内になんとか終わらせねばと、あっという間に2年が過ぎた。

♥これから

気仙沼市から戻り、上下水道局防災危機管理室に配属された。中部地方にも南海トラフ地震がすぐ近くまで来ているので、東日本大震災から学び、多くの人々に注意や備えをしてもらいたい。自分は大丈夫とは思わずに、震災は人の想像を超えてくるものとして、大切な人のために、日頃から心がけをして欲しい。災害時に先頭にたって復興に携わる職員への教育や防災に関心をもってもらうことが大切である。

また、東北の職員が頑張っている姿を伝えたい。



気仙沼市下水道課（屋上）からの景観

あの日テレビで見た映像に心をしめつけられ、何かできないかと思っていた私にとって復興に携われたことを誇りに感じ、私が与えるよりも多くの贈り物をいただきました。自分を見つめ直す大切な時間をいただけたことに感謝する。